



TITLE:

計画8-1 ヤクシマザルメスにおける 性行動と採食行動の関連(Ⅲ 共同利 用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

松原, 幹

CITATION:

松原, 幹. 計画8-1 ヤクシマザルメスにおける性行動と採食行動の関連
(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1997, 27: 89-89

ISSUE DATE:

1997-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/164933>

RIGHT:

計画 8-1

ヤクシマザルメスにおける性行動と採食行動の関連

松原 幹 (京都大・霊長研・生態樹幹)

動物の発情は採食時間やエネルギー摂取に負担をかけると言われている。しかし、採食行動は社会的な影響と切り離せない。発情メスの配偶者選択の違いによる採食行動の変化を検討するために、1996年9月中旬から11月下旬まで30日間、鹿児島県屋久島西部地域に生息するヤクシマザルの自然群のメス7頭を対象に終日個体追跡法を用いて調査した。全ての発情メスは複数オスとコンソート関係を結んだが、 α メイルとコンソートした日は採食時間がほとんど減少しなかった。また、 α の順位効果によって他個体から攻撃されずに採食できた。複数オスとコンソートした日は採食時間が減少した。これは発情メスが積極的に求愛行動を行なったためと考えられる。採食や移動時に α 以外のオスから攻撃頻度が増加した。伴食者としての α メイルの効果は、 α メイルの順位効果によって他個体を排除して採食できるため、栄養・エネルギー不足が解消できることが考えられる。 α メイル以外の個体とコンソートを組む場合は、影響によって採食時間の減少が食物摂取に悪影響を及ぼすだろう。しかし、採食時間割合の減少を補う効果がある行動が観察された。 α メイルコンソートした発情メスの攻撃による採食場所の乗っ取りは、コンソート相手の順位効果を利用した採食競合への積極的な参加であり、単独もしくは小集団での採食は、採食競合を避けるためと考えられた。複数オスとのコンソートは採食時間を減少させるが、メスはより効率的な採食を積極的に目指しているのだろう。

計画 8-2

屋久島の上部域に生息するヤクザルの分布と糞分析による食性の研究

大竹勝 (日本モンキーセンター) 好廣真一 (龍谷大・経営)

安房林道から黒味岳にかけて (標高1300~1800m) 10.5km²の地域をブロック分割定点調査法 (大井他1994) にてヤクザル群の調査、採集した糞の分析による食性の研究を行った。現地調査は7月25日~8月8日の15日間、調査員は延べ42名。調査資料のまとめは京都、糞分析は犬山で行った。調査域内で11集団/群れのヤクザルを確認した。内6集団で雌またはコドモが目撃されている。他の5集団では発声・遊動の状況から群れと判断した。9集団が今回の調査域内を主に遊動し、2集団は主に調査域外を主に遊動し一部調査域も利用している。後者を0.5群として計算して、分布密度は0.95群/km²と推定した。安房林道周辺の2群は林道に沿って比較的長く大きい遊動域を持ちこの地域では群れ密度は低く (0.7群/km²)、群れサイズは20頭以上、23頭以上と大きい。標高1400m以上では群れは小型で高密度で分布している (1.5群/km²)。採集した糞は合計44個。採集地点は歩道沿いの植生攪乱のない上部地域1480m以上と、林道沿いの植生攪乱のある下部地域1360m以下で、下部地域はすべて林道上で採集された。糞内容物は上・下部地域で二分される。上部地域では広葉樹の葉、菌類が多く、下部地域では種子、繊維、昆虫が多く下部地域でサルトリイバラ、ホウロクイチゴなどの種子や昆虫が多く含まれる。林道周辺の二次植生に対応している。下部の群れは人なれしていることから観光客影響も考慮する必要がある。